俳諧七部集

炭俵

二

イ 4
3157
23(2)

14
3157
23
(2)

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らハ常ゝ芭蕉の折
りりよひ毛の宗をひらき心の泉をくみしく
十市ありて乃文字の野風をうけてあつる輩也　君
ある冬との〳〵夜もすがら其の二三子庵に侍て
火桶によりし炭をおこす菴をもれて見をほどけ
宋人の手亀（カニ）らすといつる業を思ひんと素の枯れ著
に媼（フキ）のさしやりみるを窓によりて構ゝとして

今度のね乃古竹によ免し言ありまろひゝく
ある乃ころうつり耳に入けくとつゝうのめこる乃め
まとしの足に泥のすりかもひつやこれをさひゆけるの
日乃いつて出しより秋乃月にうしらかき高市河
や吟詠り篇らし竟にけあうちの三まとひ
わゝつとえ毛をひらきみるに有色の絵をあやとり
れさむれうえくわき炭の句みさうなそしを
能字をかく仕侍うハ詩の正義にいへる五川のまる

けふハやま乃きくのゑひよハかね例の口に
任せさるまもあらす霧よりもあらつくまゝうし
ひと日芭蕉旅行の首途よや川かつ庵を携して
両人の紀を契り行此木の集の下に夜てその
家の夜ふかく炉の桐の下にいたくあふき炭の匂ひ
年をうちまつりこもりて炭俵ならしといへるハ誹也
名つく稲こちこゝろを小子にとりてよしとみあひ
まるとや此書をえて胡蝶と成ようさとの心ちして

冥しり序かけてよといひ捨てわかれぬ今此事を
うちかへ其初をおもひて題号をのへつらひあり
けふ年をつくる炭俵はあしきとなるを
清む

元禄七の逢夏閏さつき初三乃日素龍

誹諧炭俵集上巻

むめがゝにのつと日乃出る山路かな　芭蕉

處々に雉子乃啼たつ　野坡

家普請を春のてすきにとり付て　仝

上乃たよりにあがる米乃直　芭蕉

宵乃内はらはらとせし月乃雲　仝

藪越はなすあきのさびしさ　野坡

ウ
御頭へ菊もらはるゝめいわくさ　野坡

娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉

奈良がよひおなじつらなる細基手(ホソモト)　野坡

ことしは雨のふらぬ六月　芭蕉

預けたるみそとりにやる向河岸　野坡

ひたといひ出すお袋の事　芭蕉

終宵尼乃持病を押へける　野坡

こんにやくばかりのこる名月　芭蕉

はつ雁に乗懸下地敷て見る　野坡
露を相手に居合ひとぬく　芭蕉
町衆のつらりと酔て花の陰　野坡
門で押るゝ壬生の念仏　芭蕉
右
東風ゝに糞のいきれを吹まはし　仝
毎しまるよしに肱わつらふ　野坡
江戸の左右むかひの亭主登られて　芭蕉
こちにもいれどから臼をかす　野坡

方々に十夜の内のかねの音　芭蕉
桐の木高く月さゆる也　野坡
門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉
ひらふた金で表がへする　野坡
はつ午に女房のおやこ振舞て　芭蕉
又このはるも済ぬ牢人　野坡
法印の湯治を送る花ざかり　芭蕉
なは手を下りて青麦の出来　野坡

ウ
どの家も東乃方に窓をあけ　野坡
魚に喰あくはまの雑水　芭蕉
千鳥啼一夜〳〵に寒うなり　野坡
未進の高乃はてぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて来て　野坡
屏風乃陰にみゆるくはし盆　芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花さかり　嵐雪
あさみや苣に雀鮨もる　利牛
片道は春乃小坂のかたまりて　野坡
外をはざまくに圃のお撲撈　嵐雪
ずぶ〳〵と鞘日くれの雲見る東　利牛
で稼まれ嘆猪もおどに出る　野坡

ウ
溝深をとおす流川の音はさん　嵐雪
あちこちはれそ昼ねなりつ　利牛
隣より菖と嫁を呼手来流　野坡
てうくしくも巻るかいやわ　嵐雪
思案乃あちこち墨誇庭後院　利牛
五百のうちを二つにもちみ　野坡
綱めき乃いまだ鳥語あをつて　嵐雪
人まちかぬ松見むし　利牛

雜役乃鞍を下せハ日かくれて　野坡
飯乃中なる芋をほる月　嵐雪
漸と雨降やミてあきの風　利牛
鶉ハ隠みなくハ又斛にく　野坡
若
奉ニ乃丸ましお龍代昼寝て　嵐雪
抱揚子乃小屋を流　利牛
こゝゐよしと河内乃嵩拖送盆　野坡
心みに流し着君せん多く　嵐雪

壻乃来て娘君世とえ成にけり　利牛
ことし乃あれも何も曇ハなし　野坡
金作乃御要はとをさせまん　嵐雪
浅うハねハ乃ふ多皆よの気　利牛
斎者絹もて鍛風に吹倒し　野坡
寺撈乃喧嘩乃端に出む月　嵐雪
出もとミし寝て人になる　利牛
今月庄や君そちハ淫となれ　野坡

賣(ウ)手もうつてみせけるたゝみ紙　嵐雪
日ゝわくとゆきのふり出し　利牛
鎌倉乃便きゝのせに走らする　野坡
うしとらぞ鳴出す雨の引　嵐雪
枯安かる母をほくめて窓の陰　利牛
まくらひ乃てる盆月乃隣　野坡

深川にまかりて

空豆乃花さきにけり麦の縁　孤屋

昼乃水鶏のはしる溝川　芭蕉

上張を通さぬほどの雨降て　岱水

そつとのぞけば酒の最中　利牛

寝処に誰もねぬ夜の月見て　芭蕉

どたりと塀のころぶあきかぜ　孤屋

ウ
きりぎりす薪乃下より鳴出して　利牛

晩乃仕事乃工夫するなり　岱水

妹をよい処からもらはるゝ　孤屋

僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉

風細う夜明がらすの啼わたり　岱水

家のながれたあとを見に行　利牛

鯲汁わかい者よりよくなりて　芭蕉

茶の買置をさげて売出す　孤屋

こ乃春ハどうやら花乃静なる　利牛
うれし梅花今に兆して　岱水
雪乃跡吹はかしたる朧月　孤屋
ふとん丸けてもの思ひ居る　芭蕉
名
不届な隣と中乃わるうなり　岱水
はつち坊主を上へあがらしれ　利牛
泪ぐみうらに出来はかちなく　芭蕉
黒木ほしけるかまをなかむる　孤屋

花見にすゝんでねまきも汗をふく　利牛
客を送りて挑灯桃臺　岱水
今乃まにくさ乃学居を招てみる　孤屋
年貢すんだとほめられにけり　芭蕉
息災に祖父乃しらが乃めでたさよ　岱水
堪忍ならぬ七夕乃照り　利牛
名月乃まに合せ度芋畑　芭蕉
[illegible]　孤屋

ウ　どの家も窗出かねてむおし　　利牛

山乃根際の雪かゝりこし　　岱水

よこ雲にそよ〱風乃吹出す　　孤屋

晒乃上にひばり囀る　　利牛

花見にと女子ばかりがつれ立て　　芭蕉

余乃くさなしに菫たんほゝ　　岱水

芭蕉
孤屋
岱水
利牛
各九句

百韻

子は裸父はてゝれで早苗舟　　利牛

岸のいばらの真白に咲　　野坡

雨あがり珠数懸鳩の鳴出して　　孤屋

与力町よりむかふ西風　　利牛

竿竹に茶色の紬たぐりよせ　　野坡

馬が離れてわめく人あり　　孤屋

暮の月干葉の茹汁わるくさし　　利牛

掃ば跡から櫟ちる也　　野坡

ぢゞめきの中でより出る浮あゝの　　孤屋

結もてりなれどやゝ手わに平れ　　利牛

杦垣やあさ川へむいつれて過ぬ　　野坡

吹けし瞬もしつうき関是非　　孤屋

十二三弁乃衣乃打るひ　　利牛

本堂はしるまれてえんし　　野坡

日乃あたる方はあからむ竹乃色　孤屋

只奇麗さにすめる谷川　利牛

近道(?)乃こゝろ尋る詞をも知て(?)　野坡

天(?)うらまの桐よころの月乃照(?)　孤屋

生(イキ)なまり(?)出たに打込し(?)に漬　利牛

椋乃実落る屋根くさるなり(?)　野坡

節(?)貰乃庵(?)か連て来る(?)女(?)[illegible]　孤屋

此(?)藪(?)後(?)こゐ乃人見えて　利牛

ほかしと二日灸乃いほれ出　野坡

ほろしはく見るほにほこし(?)　孤屋

ない袖を振てみするも物おもひ　利牛

蝶(?)羽乃糸もよほれる(?)縁　野坡

ほくりあるゝ(?)武士乃[illegible]のつほ　孤屋

出(?)お乃かもめ(?)今日まて大旱(テリ)　利牛

切蠅(ウジ)乃喰倒しける棟たるき　野坡

くろか(?)細工を仕色々屋庭(?)　孤屋

癰ひをまぎらかす日も終しかん　利牛
嵩でまけたる分の重さき　野坡
つまあはの名をいやしげに惜みけり　孤屋
とかはの裏とは聞き井の本　利牛
すれ違ふ月旅の賄来る程　野坡
ずいきの長みあまるとつくる　孤屋
ひつそりと盆は過たる浄土寺　利牛
戸てうるみての風呂の屋敷　野坡

伐透に柳と楢の末をあけて　孤屋
赤い小宛を安うしてやる　利牛
後ぞと宿かる男の節をかぞへ　野坡
師走は比丘尼の諷のこゑ清し　孤屋
餅搗の臼を運し貰うて　利牛
来海老の此度又忘れ分け　野坡
底狆を入れひつくる船の者　孤屋
むく紀にして末報鏡　利牛

燧志けり壁を尻に指くて　野坡

中宮五文のおわまはしまする　孤屋

月影にかきあへ蝶乃絵ちらす　利牛

張寺房　俵雲ゝ藤　孤屋

二
積婿絶ゆいとこ庭に紀うけ　野坡

小豆まへ乃宮静しく　利牛

旅撃に脛も光をなれ出して　孤屋

緒もん待うけを念入てみる　野坡

麦畑の替地に渡す傍爾杭　利牛

賣ゝ手も志らず　村改めん筆　孤屋

物毎も子持になればだゞくさに　野坡

又流高見ん古見んいくて見　利牛

跋まちもん之人に上れ之二人うき泣　孤屋

さふもゝえんうゝ寐し　ゐわゐわ　野坡

葛ゝ雪見こまへ　神主を添出し　利牛

一つくたわ年　鐘乃　いやす鐫　孤屋

終しに菰引ちぎる鳫乃月　野坡
大あましむとる裏乃隣家ハひ　利牛
三ウ
やいと据て寅に呼ひる賭のあ　孤屋
文たのみして貧法たよねさく　野坡
めくはせに申先己乃目出よろつく　利牛
入来る人に味噌豆を出し　孤屋
すちかひに木綿稲乃新田川　野坡
ハ昼茶は乃みつる寂乃名つき　利牛

ほやしとゑどほめらすゝきちらされ　孤屋
ふ菜に鯨まじる煮汁　野坡
杣乃内引鋸て居る樫原　利牛
飛脚に路渡る道よく　孤屋
出ちるゝうをく咲の萩よかゝる　野坡
入ゑつく月乃六月　利牛
掛立ておゝ出家居ひろはる　孤屋
萬ゑつのる何うらゝうれひ　野坡

名
大水乃あとに畑の砂乃けて　利牛

何年越挽しきぬ杉の木　孤屋

養生に弓引心乃あさゝ鏡　野坡

丸九十日湿をわづらふ　利牛

投手もちう逢またにかつくし　孤屋

足なもし茶藁よう備にまる　野坡

星鮮き嗅れ引乃むずつれし　利牛

やさうらもの世嫁乃裸かと　孤屋

宮にとゝる預り年の精進箸　野坡

うんちう果る八専乃空　利牛

丁ゝ亭に仙鼠儀乃口きゝわ　孤屋

許諸の滝て生まになる厳　野坡

夕月に霧無男ゝの世咲きれ　利牛

色ても法師鍵乃やきもの　孤屋

名ウ
気短を今年男風よ鍵屋で　野坡

もそや仕るしもなまぬあとへ　利牛

寒病(やゝ)呂舞土用をうらなふか　孤屋

宵月おぼろしこゆゑ手枝　野坡

城もまぬ細縄屋の後世乃居送迄　利牛

門建なれ町の夜渡　孤屋

役屋も一寸乃米高借て　野坡

ゝ人大すりのつめかけてまで　執筆

春之部發句

立春

蓬莱に聞ばや伊勢の初便　芭蕉

東雲やきのふにかはる松　濁子

みちのくの人も窓あく鶏の海老　杉風

春や鏡ふ母波見康も角とし　京 去来

刀帯に便もつまじし今朝の春　膳所 正秀

いそうしき若菜乃かきちかき　大坂 洒堂

鳥つくや木芽乃くさびの粕袖　一徴水

粗いき門流歩もの手貌ひ　沾圃

閑下にも中に見白や年見附豆　孤屋

初日影梅の葉にもつまきそや　利牛

若松の親乃為にも来る人数　野坡

梅

梅一木つましく草乃庵かな　露沾

むめ咲や何乃枕木見よときまかり　曲翠

むめが香の筋に立よるはつ日哉　支考

家乃うちをみてこえて
むめちるや糸乃光も日の名残　伊賀 土芳

梅咲て酒屋の上のまきたのまぎれ　利牛

赤みさす梅を咲やむめの花　游刀

みなしらぬ咲ものからを梅の花　野坡

手折まで娘はきまる妻戸かな　杉風

おくらくともの七くさをみて
さくもあるも続けて見つる芳かな　孤屋

七草や粧ひかけて切刻　野坡

うちむれてわかな摘野ゝ腫ものし　仙杖

浴衣乃文字そしは

朧月一足づゝもわかれかな　去来

大はらや蝶乃出てまふ朧月　伊　丈艸

おぼろ月まだ宵ながら中々に　仙花

深川乃気色

花闇や家乃鍬かも二ケ一　利牛

十五日立や朧月乃出る雲　大坂　之道

梅乃遊新まうら覆てあるし　野坡

ねこの子乃くんづほぐれつ胡蝶哉　其角

鶯

うぐひすは浮世と思する為哉　嵐雪

鶯や葉をしいて菜乃文　其角

うぐひすの声に起けり蓑虫　桃隣

うくひすや門はたま〳〵豆腐賣　野坡

鶯呉んつまりしも念を入るゝ也　利牛

柳

こねかえもつゝして挿し柳かな　湖春

隣へのごし月の夜ひうれ柳かな　素龍

両人みちそれてさゝくし柳かな　野坡

せきぞろの尻見付たる柳哉　一風

町なかへきゝし窓見る柳かな　利牛

傘に押わけみたる柳かな　芭蕉

椿

古ちこぬ籬手ちる也椿かな　孤屋

枝もろく伸ぬ花を椿かな　湖舟

念入て冬からつぼむ椿かな　曲翠

寝てうきゝみせて見つるま　嵐雪

京の杉も須ゝ家の雪椿　支考

乙女掃除さくらもはなの雲　野坡

花

人のしきるんにまゐ伝しけるて

幕打侍八丈もの小袖の

あけばましなかなる雲

ろの松からまたゝめて

四ツごきのそろはぬ花見心かな　芭蕉

めつしやわびし花の色めしら　杉風

うつくしと見て八花見の留守かな　土芳

けうしの方乃花見

花見に行かて

中下もそれ相応乃花見かな　惟然

花ちるや伏見うしろを突あたり　去来

物かしの湯色吟猿や庵の花　孤屋

あすしらぬおもひの宵寝のくれ木　荊口

大かれても身のくいきうらめんかな　耕虚

柳乃髪ゆかまをすや寝の中　此筋

牡丹すゝ人もやるんころきのう　淵渓

あらたゆかと春の五戒乃桜かな　其角

春とよりも毛虫尺取し梅桜　嵐雪

やまざくらちるや小川の水車　大津尼 智月

青柳も花に霞のつきあたり　大坂 之道

誰母の家に強飯くうまゐる　伊賀 猪来

山桜小川飛こえおなごかな　伊賀福井 宗全

昆布だしや菜よみのつく栗(クリ)蒸　利牛

おちつきを見るやおをもや桜とか　仝

折る人の桜でふくや家の床　孤屋

ふくまでしあろ小川なくして家かな　野坡

会乃奴みなみかつきまやらまのう　仝

上巳

常陸川の末もなし汐干哉　沾洲

登舞乗やけしの桃の花　桃隣

ぬつきの跡いつまでの雛　其角

男の子は僧を見るもひなまつり　如行

日半路を照られて来るや桃の花　野坡

麻の種毎年蒔す桃の花　利牛

一段低やころもよもの花　孤屋

青柳の泥にしたるる塩干哉　芭蕉

猫しられ

猫つほり命すてむ小あめに　洛城田夫 為有

まさめや蝸乃巣つくる屋根乃漏　芭蕉

放猫かつしの葉やこゝ哉　子珊

ほろしとこみ猫門乃つゑめに　然祗

ゑのりやけ乃て闇や風乃末　伊賀人　猿雖

こまれよきしき梨乃花乃嵐哉　仙華

旅行川まて

法夜鳴ん猶わか肉ハまよ哉　野坡

此集いれて宇を此孤路旅立

今日の名た見川まて見えかねて

雲に霞ことまて雨もおぼつかな　野坡

梅さかりぬらく月さくのわ寒さ哉　利牛

一 夏之発句

首夏

ほうゑ乃素袷に見し衣かへ　嵐雪

衣かへ十日もやゝも新ゝの日　野坡

綿をぬく精みへせりし衣更　九節

雀よりやはき姿や衣かへ　雪芝

末乃紐けさんよほとの茶か哉　子珊

麻衣乃晩笠白し衣更　利牛

卯乃花

卯の花やくらき柳の及ごし　芭蕉

う乃花の絶間たゝかん闇の門　去来

新樹

う乃花に芦毛の馬の夜明哉　許六

卯のはなに扣あけてやかつをうり　支考

須らしさす

拵乃鏡をやう流しめしうを　湖春

甦宗祇池に昔しある山水　素堂

うくひすや竹の子藪に老を鳴　芭蕉

郭公

ゆまひを二階にね夜ほとゝきす　桃隣

ほとゝきす一二の橋の夜明かな　其角

杉檜を月見る夜にきかんほとゝきす　嵐雪

挑灯の空に詮なしほとゝきす　杉風

木ゝくれて茶摘も聞やほとゝきす　芭蕉

青雲や舟なかしやる子規　素龍

吹る帰りし風が雨になる　利牛

子規顔乃出されぬ格子かな　野坡

麦

拵ちに麦穂いやしや化どり　荊口

麦乃穂と左にさゝや羅漢山　千川

麦跡ぞん田植や近き道とほ　許六

蔦乃揺河を川ほとまにて

刈こみし麦乃匂ひや宿乃内　利牛

みちのくし吟行

麦畑や出ぬけても猶麦乃中　野坡

おなじくことゝを

帰る也むしろの蝶乃あとをきても　岱水

端午

五月雨や傘に付る小人形　其角

さうぶ葺くみえやはつきの風の色　大坂 洒堂

五日まで名すみいうめ人あやめ哉　桃隣

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

みをのやもて肩乃骨くる甲冑かな　仙花

帷子に袖もてしめぎ轡かな　素龍

夏旅

笠松をみこえし町乃あつさ哉　臥高

枯柴に昼寝あつし足乃まめ　釣虎

二三十歟鶏も鳴ともやはらい　去来 尚町

ちげ山乃力及ばぬあつさ哉　猿雖

すゞの地や木橋も菓見えし　芭蕉

此句ハ旅ゆきのほり

五月雨

さみだれやとなりへ懸る丸木橋　素龍

さゝ濁る色もよど川大和川　桃隣

さみだれに小鮒をにぎる子供哉　野坡

五月雨や家乃まはりの商陸（ヤマゴボウ）　嵐蘭

うの人柳繁茂あまたてらしぬ

五月雨や起も枕もものゝ本　岱水

涼

川中の根木によろふすゞみ舟　芭蕉

月影にうごく夏木や葉の光　女 羽紅

涼しさは揺よまはる竹乃枝　長崎 卯七

川縁をさいでさまするすゞみ哉　探芝

涼風をまたれて涼し夜の庭　智月

すゞしさをあれと柄杓（ヒサク）乃まゝ　伊勢 兀峰

まし高や涼所出るへ乃防とく　去来

夕すゞみあぶなき石に乃ぼりけり　野坡

三ヶ月に隠れてすむ哉　素堂

難しけり

椿や宿かれ出るあれとこそ　杉風

扇子もてや砥葉すゞしき停主　正秀

世乃中や年貢畠乃けしの花　里東

早乙女ハうへてわすれたる葉隠れ　嵐雪

木曽路を経て

やまふきも巴も出る田うへ哉　許六

ひるかほやあつさをさますのゝ哉　智月

をへるや人もすまぬめかるみ　小緄

蝉乃めをはまはせよそすの宿　乙州

あらしあらぬこハそうわらへ哉　み州

嘆みしあのみやゝ　蓑　仙花

こいされ蝶もうらてわつかあ　楚舟

ありうる晦り霞すす春の夕　残香

猪乃一月にり来より菊子宴　乃有

国夏待町乃あつさへうな　也風

けふとむもく鶯見揺や雨の家　祐甫

一枝もくすけなき作見んわちえは　仙花

竹見んすや児見盡くさき乃らうつき　嵐雪

さくへき人　借り酒をたしむ事を
かく称め乃ひて浮世しむきうた
あうえに、られをとし気てあうき
あハりわなれと名ならかあちをえおて
あらしせられぬれ汁をうきて

強て酒乃名見つてあけさは　利牛

あら人の不堅いさなあられ妻
牛和てみよしを久つき
不見らとをちあ出して

行雲をねてみてみるや夜庭　野坡

誹諧炭俵下巻

穐之部

秋のなかれいつもしの中より
月を題して附俳のうちを
えらみす

名月

明月やえんつめくらふのおもてつき　湖春

名月や椽取まはす黍の虚　去来

家買てことし見初る月夜哉　荷兮

名月や誰吹起す森の鳩　洒堂

松陰や生簀揚る江の月見　里東

いち後の棚のかく岸よりの月　利牛

家くらつまでもこぼしゝはの月　其角

むさしの仲秋の月そしめくし
見侍りし望峯ノ不盡の擬盛と

明月やみふこえみゆるともまつの町　素龍

七夕

笹の葉に枕付てや星むかへ　其角

星合よまくれ逢みもかやの縁　孤屋

七夕やゆかりなりしもあまの川　嵐雪

盂蘭盆

ちゝこひよなくに新や玉まつり　洒堂

踊るへきほとさへ八朔て盆の月　李由

盆の月ねふきも川をてらしけり　北枝

朝白

閑園

朝白や昼ハ錠おろす門の垣　芭蕉

朝白や日傭出て行跡の垣　利合

[illegible]朝白ハ[illegible]　游刀

秋虫

まよれと あきハ ふしう きすらす　香月

悔ら人のとられや きりし す　大中

蟷螂りらんて 菊 あるめらこゑ　為有

こうろきや 若て 追やう 桃の上　孤風

床

あき床の鳴しを見こえ小夜更　車来

人のもとへまかりて

床のふむ 机や 硯の 狩衣　蒼虬

独りのともし

色に染や まれそろ 床の長　土芳

草花

女郎花の花やなよ竹のあ　桃隣

萩すゝきうへちるやおすし見　野童

竹葉の花やろを紙の裡　猿雖

草の穂や白い樫揺れてゆくれ　文里

きゝえはうえ

草の名は芥川もや宵の秋　芦生

山中の草花をみて

草花や鹿の傍ちるかなと　其角

閑筆

蘭柳もしあるとなのくりけ　杉風

萩蘭をよく咲出して白き　桃隣

秋　植地

柳のちる夜をことものなどころ　行牛

蕣や笑ひちらし錦の甲　猿甫

秋風や荻すの根の浮かし　未佗

薄はそて宿よちらす柳の根　流水

ときうしの名を南度かしと号ハ
それか流世あちこつくひさしうし決
まや　未祥　おいつき天のくきうらえ
八ツるうらといつるハそのくちとものぬ
るへのめくあらんて乍ら是て
みるやけしうれ名闘ハ此のむすれ
竹のふてらちれえ天資らり数の理
さらし眠むへりすうわかの花を
いろや石菖りのきおて竹極の
ちのまし　あるは上この仕人ちよ
ともすれ公りちらのちょうこめけの
つくまたうれて　やみの　くられ

六條のつよおろしのひけとふあら
うとあやうく行をかぶのくら
まなじるをかんりハくれもし眺めき
大きくたう縣つの館のよそしけは
うしつめてひんれ棹のほとうくて
みきるとるう念会葉のとき
ふくえ出されむらくハやほく豆腐
の山ふんぶのかとみちらと筆ふ
の頂上とやりくハつ百あまり人の跡
りしての除きうみちの介の
小畳りこうね一すくれてらんち

老くとひとつみのりしを天竜
やしなひわとうくいやしゅくくこと
もあまそしいまたの人くも此
世をさうつれとはるし老きものむ
へうすくまぬもみすへきを　中庸
ともち家

石菖と
　経てしぬくきや
　　露うこし
　　　　　　那坡

題しらす

末摘花かゝぬや秋のさびしき　嵐雪

水風呂の下や案山子の身の終　丈草

碪ひとりよき海鳥のかれて〻は　洒堂

秋のくれいよいよかるくなる身かな　荷兮

草刈や黄昏も見へハ峠しぬ　荊口

夕皃のけハ秋しるあさかほ　素堂

ゆく秋ハ風そよりても身のあはれ　北枝

秋風よ蝶やあふなき世の上　信之

庖丁の片袖くらし月の雲　其角

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ　其角

市中や木の葉も落す小し風　桃隣

冬枯の磯に今朝みるとさか哉　芭蕉

桜木や藁張まりて冬こもり　支梁

枯の菜のされわりや小松原　鉾花

刈株の紅の涙もさらしめ弘　柳実

風の音よとまる小春哉　孫吉

神無月や猶のもも迄木　巻石

凩や脛(ハヾキ)さげたる猪の面(ツラ)　八桑

市来山を越て

木枕の枯まわ竹枕波多　桃隣

箒目よし菜の蕪筋のさむさ外　涼力

時雨

芋喰の後へらし行時雨哉　荊口

思ふ事や沖の時雨の明りかな　文竹

芭蕉翁を

一つ葉にすゝめてまねきまん

うかぬかと今日八時雨よ其の宿　斜嶺

生物とおもふ庵しくれ哉　許六

雑春の部

小庇雲の白き梶やまぬ　此筋

大根引といふ事を

鞍壺に小坊主乗るや大根引　芭蕉

所々よりとりれえ荒れえ大根引　此筋

神田は進みて青野の土大根　師走

佐むさとなる文字にまして

人寄の夜半をとる涼し清水　也陀

又比を先拵もむさ入　示悟

高支切よ咽めも涼し涼さ永　利牛

又りともちんて涼し冬の月　和有

霜底や筆うちよせてもの月　里東

木のくらき角川のまへ
きとわし比伝ありの峠の
らしときつるとみく
かかし出しぬ

雪

ちらちらと降りを新しき氣色かな　雅夜

初雪の見やとなりの鼻もしら　利牛

ちる雪や嫁の世の其の上　岱山

雪の日は笠を傘(カサフ)に鰯(ミヰ)鮮(サヘノ)　仙化

雪の日やうすやうくつきし跡　桃雅

きのふの波を立ちしる

狩の衣の雪狩るの客の鷹　其角

朝の錦や仏みへかくれ雪の錦　野松

ちる雪や見えつや清うむる　洒六

炭竈の煙町さる雪吹けり　湖丹

比良の高嶺しれ雪を降る　乙州

江の舟や曲(ヘ)寄(ツイ)りし見合うの鷺　孝新

題不知

かなしさの痛く花色枯野哉　羽黒亡人 呂丸

蕪菜や粉糠のかゝる臼の端　芭蕉

陵門の菴を紫みゆる杉垣　許六

昧出焼のうるめぬところ打しまま　野明

白うをのとろきをれや枝の霜　之道

猪の冬やあらつき方の五右衛門　丈艸

屋中やこそ火燵のある在家　野坡

往と往う緑飯まへて作と神楽　其角

淋く降しまなやいゆくく信の雪る　仝

もちつき

煤はきハ己が棚つる大工哉　芭蕉

煤掃やしをとくハ仏なる　専吟

隣つきやこえ組さする笹庵　如柳

山伏の見やりよ立る何か哉　嵐雪

侍きや状をよしらるをらぬき　智内

歳暮

このくれも又くりかへし同じ事　杉風

そうまきぬ祭見もかはまのくれ　李由

あしよせて宗匠ねらしのくれ　智月

猫やこのけむしさよまのくれ　孤屋

としの雨ハ宜もらる信ぜ哉　猿雖

年のくれまよとまき持つもん　野坡

芭蕉翁の身まかりそれの日
ひとゝせ嘉永中五

凧断て心や残しやまこの月　蕪水

引まよふ夷之とらしぬ粉花とけ　渕春

誹諧秋之部

秋の空尾上の杉に離れたり　其角

おくれて一羽わたる鶴　孤屋

普請に日傭揃る貝吹て　仝

月の隠し口扉の門　其角

秋又うまの宍物を炭よせあさ　仝

てひろにハ桃えとるをます　孤屋

下京八宇佐の裏あらしつれて　仝

博もの宵ずて裏をはなしを　其角

足軽の子をよして兆八川下ゐ　孤屋

去吹ふらす香気の針　其角

御の蝉よ又当把て揺く玉　孤屋

花の先さひ跡ふきの花　其角

竹燈の新蝉きうけしく接　孤屋

新しく物来てうくしれの月　其角

綾羅ハ絹のきれハしをぬく　孤屋
雁の下よう露さこの春し　其角
見し物の桜は桂の名もあみも　孤屋
むかしの名ある色のきえせて　其角
ゆさ心行あき念のつきれ衣　文
冬の縁のあそしき　池　孤屋
夜ならのぶとききぬてやつれ名者　其角
あかくとらえ小僧いやする　孤屋

まの宣命様の様もおちりて　其角
夢さきまくりの風を見川　孤屋
君まねえこのれ沢なの泉となり　其角
禅と燈との行着つる　孤屋
辛勝へ巻のとかる秋のあれ　其角
此わ流れ月の空 行キ　孤屋
蝋燭して見えて華わ隔の餘　其角
よ塗なしまい強てくろく　孤屋

名ウ
小栗読む片言まぜて哀なり　其角
きぬもあらく洗茶の手拭　孤屋
新居猪えり竹来て
海へのりうり見ても
今やら来る漆ても沈　利牛

其角
孤屋
文さうる

天野氏興行

道くだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣

どんどと水の落る秋風　野坡

入月に夜はほんのりと明かゝり　利牛

塀の外まで桐のひろがる　桃隣

銅壺よりなまぬる汲んでつかふ也　野坡

つよふ降たる雨のついやむ　利牛

瓜の花是からなにゝなりかゝる　桃隣

近くに居れど長谷をまだ見ぬ　野坡

年はくる者と常住ねかはし　利牛

いつまでかうは十日のそら　桃隣

屋根ふきて八日盤まで立て　野坡

ふりかゝらし嫁の仕合　利牛

大名など[illegible]　桃隣

[illegible]りける　久日　野坡

けふまで念仏さうらふ雪の内　利牛
畔よつまがりきてあたゝめし　孤屋
人のお負ねえ寒をなるへん　野坡
うえや孤もれ十あり手川　利牛
よね平の様な物八百右て　孤屋
むらの小みしれと見色に　野坡
実色さ葉て男新(タイ)あやしかるて　利牛
ゆるりしきしの塩さいへ　孤屋

七なの葉をきしし秋の露　野坡
枝の末まけ月うつし　利牛
けしける者の鳩しの赤うて　孤屋
まるのまへして又蒲(セキ)鉢屋不結　野坡
よいやまに高みそ上(テン)をとおてみる　利牛
若やしこれハあたらぬ高(ヒ)　孤屋
帷子に肩よりぬぐ異見ゆるて　野坡
京もおつかぬ乱れ念入　利牛

名

燈ちかゝり絵合する幕回影　　桃隣

傍を流れて今もおそくる　　利牛

鬢ゝおもえゝ常縮をとすゝ心安さよし　　埜坡

先沖よそにみゆる入舟　　桃隣

内てよわ茶をまぎらしも身の底　　利牛

ちりこと風のふくめ花開き　　埜坡

神無月廿日

ふか川にて即興

振売の鴈あはれ也ゑびす講　芭蕉

降てハやすみ時雨する軒　野坡

番匠か樅の小節を引かねて　孤屋

片ハげ山に月をみるかな　利牛

好物の餅を絶さぬあきの風　野坡

割木の安き国の露霜　芭蕉

網の者近づき舟に声かけて　利牛

星さへ見えず二十八日　孤屋

ひだるきハ殊軍の大事也　芭蕉

淡気の雪に雑談もせぬ　野坡

明しらむ籠挑灯を吹消して　孤屋

肩癖にはる湯屋の膏薬　利牛

上をきの干葉刻もうハの空　野坡

馬に出ぬ日ハ内で恋する　芭蕉

絈買の七つさがりを音づれて　利牛
塀に門ある五十石取　孤屋
此島の餓鬼も手を摺月と花　芭蕉
砂に暖(ヌクミ)のうつる青草　野坡
新畠(ハタ)の糞もおちつく雪の上　孤屋
吹とられたる笠とりに行　利牛
川越の帯しの水をあぶながり　野坡
平地の寺のうすき藪垣　芭蕉

干物を日向の方へいざらせて　利牛
塩出す鴨の苞(ツト)ほどく也　孤屋
算用に浮世を立る京ずまひ　芭蕉
又沙汰なしにむすめ悦(ヨロコブ)　野坡
どさくさと大晦日も四つのかね　孤屋
無筆のこのむ状の跡さき　利牛
中よくて傍輩合の借いらず　野坡
壁をたゝいて寐せぬ夕月　芭蕉

ウ

風やみて秋の鴎の尻さがる　利牛

鯉の鳴子の綱をひかゆる　孤屋

ちらはらと米の揚場の行戻り　芭蕉

目黒まいりのつれのねちみや　野坡

こゝもうも年の三月中時分　孤屋

鍋炭のちりをたゝぬ春風　利牛

芭蕉
野坡
孤屋
利牛
各九句

杉風
霜の松おきはみながら鳴きし
日の出まへの赤き冬空　孤屋
下ゲ帯を一ツ濃よ打て置く　芭蕉
あいくさましし大名の供　子珊
身にあたる風もふハく薄月夜　桃隣
雲をいうしれてひろき鳥紀　利牛

ウ
絶谷の境まれしき秋のさ　竺れ
家らしうきて鰹気さびる　生陵
二こまで法杯まぬ門の稲　子珊
ゐの影り　柚のさげる千す　沾圃
竹の皮雪漉て繕へる冬のまれ　石菊
務ま子のきれ口のさして　杉風
まあ君の天も見てぬ御の秋　沙汝
せうさ月月のえやるしきも色　利合

さまくの月をかこちて旅立　依て
背中へのたる児をうへ出る　桃隣
菜むしろのきハにて上まかりて　子珊
川ぞひすゝむ山鉄いくまる　石菊
名
なまものたれて一本鍬のむ色　杉風
春戸へ日ぬれた山へ行みち　岱水
おとひなし　声くと読うつ　孤屋
五條めて八幡行き　精進日　芭蕉

勝菜を掃て傘へちりこみ　桃隣
かざしおとて　葉代のれ　依々
あみて　もくぶとん燈さきあし　沾圃
となりへ行て火をさわて来る　子珊
又けさも仏の会にかを明　利牛
掛ちわして　買てぶらし　杉風
大坂の人はまたよるるの月　利合
酒をさまれた　親母の家に入　野坡

さも有る流宗の翁のなけうかし　子珊
次の小部屋につまも売る声　利牛
狩衣をしみて居れハ殿に冷え　八桑
七つのうれ手に鐘に来る　杉風
春の海あらうよ内よ浮ひ出して　桃隣
男たちの年若菜を作る　岱水

杉風　五
嵐蘭　二
芭蕉　一
子珊　五
桃隣　四
利牛　三
岱水　三

野坡　三
沾圃　二
石菊　二
利合　二
依々　二
八桑　二

撰者芭蕉門人

志太氏　野坡

小泉氏　孤屋

池田氏　利牛

元禄七歳次甲戌

六月廿八日